

うおずみ いらくさく さはりどら
魚往為楽作 砂張銅鑼

種 別	小松市指定文化財 工芸品
指定年月日	平成元年 11 月 3 日
所 在 地	小松市立博物館

魚往為楽は、明治 19 年（1886）小松町字大文字町の桶屋の長男として生まれた。家業に従事した後、明治 37 年（1904）からは大阪の仏具師・山口徳蔵の下で修行した。その中で鈴などの鳴り物の研究、鑄造に没頭、さらに金属の知識を得るために大阪の久保田鉄工所に勤務した。

大正 6 年（1917）、石川県に帰った為楽は金沢で本格的に銅鑼の製作をはじめた。昭和 10 年には東京美術学校長の正木直彦にその技が認められ、翌年の院展に入選したが、その後は同氏のすすめで展覧会には出品せず、一途に銅鑼製作に打ちこんだ。

音曲に対して特に敏感であった為楽は音響上の効果を重視し、砂張⁽¹⁾の研究を重ね、昭和 30 年（1955）には重要無形文化財「銅鑼」保持者（人間国宝）に指定された。

この銅鑼は、明治から昭和にかけて財界の第一人者であり、茶人でもあった、益田鈍翁^{ますだどんおう}の依頼で製作された茶事用のもので「青海波」と銘されている。このような一尺八寸の銅鑼は為楽の生涯で 2 点しか製作しておらず、為楽壮年期の大作である。

(1)砂張：銅・錫・鉛の合金。

